

『歴代法宝記』の諸写本について

近藤良一

『歴代法宝記』の写本は現在までに、ペリオ本が第二二二五号、第三七二七号、第三七二七号の三本、スタイン本が第五一六号、第一六一一号、第一七七六号、第五九一六号の四本の計七本が知られている。このうち首尾完結しているのはペリオ二二二五号のみであり、これは大正蔵五一巻収録の『歴代法宝記』の底本として用いられているものといわれている。これに次ぐ善本はスタイン五一六号とペリオ三七二七号の二本であるが、五一六号は、首部十行の下半分と一葉目の中程十七字を欠いているだけでほぼ完本に近いものと云える。尚これは大正蔵の校合に用いられているものだといわれる。次に三七二七号は、標題及び別名と首部六行の下半分を欠くだけでなく、二葉目から四葉程度——少しく具体的に述べると、摩騰法師と明帝の問答の部分から道信章の前半分迄、大正蔵に当てはめると一七九bの二二行目から一八一cの一五行目迄に相当——が落丁している。とは云え他の部分には何ら損傷はないので、現在の写本発見状況からは五一六

号に次ぐ善本と云えよう。残りの四本はいずれも断片で、スタイン一六一一号は僧祭章、一七七六号は弘忍・惠能章、五九一六号は内容が『漢法本内伝』であるが『歴代法宝記』の巻頭部分の依用である。又ペリオ三七二七号は達磨章の首部であるといわれる。尚スタイン一六一一号と一七七六号は筆跡から見ると同一のものの断片であろうと思われる。

以上現在判明している七本のうち小論に於いては、最初の三本、即ち完本であるペリオ二二二五号（以下P原本と略称）とそれに近いスタイン五一六号（以下S本と略称）・ペリオ三七二七号（以下P本と略称）を取り上げ、それらの系統・前後関係を探ると共に、内容の面から見ていずれが最良の写本であるかを考察せんとするものであるが、併せて大正蔵本について若干の検討を加えその良否を明らかにしたいと思う。

さて、これら三本を比較する場合先ず注目したいのは各本に於ける書き加え及び訂正についてである。その数が最も少ないのはS本の七三ヶ所、これは返り点と書き加えが殆ん

どである。次がP原本の一六七ヶ所で文字の訂正が多いのが目につく。最も多いのがP本で二六七ヶ所三七六字にわたつて改訂が加えられている。従つて訂正の数の上だけから見るとS本が最良の写本という事になるが、この事は内容の面からも証明される。これは後に検討を加える事にして、これら書込み・訂正で注目されるのはその内容就中P本の修訂である。今挙げた如くその数は二六七を数えるが、このうちには赤筆による修訂が一三五ヶ所存する事に興味を引かれる。しかしてその内容をS本・P原本の二本と対比してみると、一三五中一一八が両本と一致しているが、一五はS本とのみ合致し、P原本とのみ合致するものはなく、残り二が両本とも異るといふ結果が得られた。上記一五ヶ所の中には底本がP原本と一致していたものをS本と合致する字句に書き改めた個所が一ヶ所ある。それは則天武后と智洗禪師の問答の所なのであるが、「則天又問うて云く」とあつたのを「則天答えて云く」と直している個所である。但しこの文は前後の文脈から見るとP原本の方が正しいのであるが、それは兎も角、この如き訂正もある事を媒介として考えるならば、赤筆による修訂は、S本の系統のしかもS本に非常に近似した写本を見てなされたと考えて良いであろう。尚面白いのはP原本のこの部分は元来「答えて云く」であつたのを上述の如く「又問うて云く」に正している事である。P原本のこのよう

な改稿は他にも数個所見出し得るのであつて、S本系統とは別の系統の写本を見て修訂したものと思われる。

次にP本には黒筆による加筆・訂正等が一三二ヶ所見られる。その内訳は、加筆・訂正が五一、書写上の誤りを返り点で正しているのが三八、誤りを消してあるのが四三であるが、この加筆・訂正の五一ヶ所中四七ヶ所はS・P原本と共通しているが、残り四中二は両本とも異なるがP本の方が正しいもの、他の一つはP原本と一致していた原文をS本と同じ字句に改めた個所であり、残り一つはS本にはなくP原本のみ存する語を書き加えている個所である。以上の如き改訂は先に述べた赤筆によるものとはほぼ一致する方向を示していると云えるが、ただ一ヶ所S本にはないものを書き加えてある個所が存する事は興味深く、赤筆による修訂とは別の写本を見てなされたものであらうと考えられる。しかもこのことは赤筆・黒筆の訂正が筆跡の上から見ても別人によつてなされたと思われる点を、二つの写本との校合の面からも示しているのである。

次に三本を字句の出入を中心に比較検討して見たいが、一先ず大正蔵の校合を信頼する事にしてP原本とS本を比べてみると、大正蔵の脚注はP本の該当部分について見ると、以下同とあるのを含めて両本の字句の出入は全部で四八四ヶ所ある。しかし実際には注の誤りが一八ヶ所あつて四六六が実

数である。これらをP本と対比させてみると、P本がS本と一致する数が四四三、P原本と一致するのが二一、兩本とも異なるものが二という数になる。しかしこの数は大正蔵の校合結果だけに依拠したものであるが、先ず大正蔵とS本とを照合して見ると、P本の該当部分だけで二八三ヶ所の校合もれが見付かった。この二八三ヶ所を実際にP原本と比定してみると、この中には大正蔵とは異なるがP原本とは一致している個所が三五ヶ所も含まれているのである。この如き大正蔵の杜撰さについては後にもふれるが、上記二八三から三五を引いた二四八の内訳は、二一七がP本とS本とで一致し、P原本とP本の合致する数は二五、三本とも異なるものが六という数値になり、これに先の脚注によつて示されたものを加えると、P原本とS本との字句の相違は七一四ヶ所、うちS本とP本が一致する数は六六〇、P原本とP本が合致するのが四六、三本共に異なるのが八という数になる。こうして見るとS本とP本はほぼ同系統のものから写されたものであり、しかもP原の後に加えられた修訂は前に述べた如くS本に非常に近似したのを見てなされたものであろう。

ところで、ここで大正蔵について少し検討を加えておきたい。最初にも述べたし上来依用してきた如く大正蔵の底本はP原本であり、比較対照されているのがS本であるといわれている。しかし今見た如くその校合結果はあまりにも杜撰で

ある。更に実際にP原本と大正蔵を照合して見ると、P本の該当部分だけで一九六ヶ所、全体で二六〇ヶ所の出入が発見できた。この一事だけを取り上げても『歴代法宝記』に関する限り大正蔵本は信頼できないといえるのであるが、これに更に前述の校合もれがP本の該当部分だけで二八三ヶ所全体で二九六ヶ所という数が加算されるのである。しかも大正蔵には明らかにミスプリントと思われるものが数ヶ所存する。それは例えば「忍大師」を「忽大師」としている所、「漢地」を「沢地」としている所——底本は勿論の事S本も「忍大師」

「漢地」とはつきり読みとれる——などがそれである。又原本を読み違えている所も二、三ヶ所存する。尚前述のS本と大正蔵では一致しないがP原本とは一致する三五ヶ所の中に「忽大師」「沢地」なども含まれているのであるが、この三七ヶ所の中には原本の誤りを訂正して採用したのではないかと思われるものさえ存する。それは恵可章の最後の所「楞伽鄴都故事具載弟子承後伝衣得法僧粲」とある所で、「鄴都」はP原本、S本共に「業都」となつていたのである。このようなものが三七ヶ所の中に含まれているのを考え合せると、ミスプリントなのか、大正蔵校注者の判断によるものなのか、或いは又P原本の他に別な底本があつてそれを採用したものであるのか、その判断に苦しむ事態さえ生じて来たような次第である。更に、大正蔵とP原本との字句の出入の二六

○個所中には、P 原本には存在しない字句が多数認められる。これの一つ一つ列挙する事は限られた紙数の中ではどうい不可能なことであるが、その内容を文章上から見ると大正蔵の方が正しいと思われるものが大部分を占めている。このように大正蔵とP 原本を照合してみた結果一見大正蔵の底本はP 原本ではないのではないかという気にさえなる。大正蔵の脚注には原本が「フランス国民図書館敦煌本」と記されてあるが、『敦煌遺書総目索引』による限りペリオ本としては最初に挙げた三本以外になく、P 原本が大正蔵の底本であるに相違ないと思われるし、先学の研究成果に拠つてもP

原本がその底本である事に異見はないようである。それにしても底本にあまりにも忠実でなく、他の写本から、特にS本から採用したと思われる語句を補つている個所が多く、他の写本と共に大正蔵本とも称し得る独自の一本を形成している事に注意しなければならぬ。ただ筆者が見たP 原本は竜谷大学図書館所蔵の写真本であつて直接原本には當つていないので、写真版では写し出されていない書込み・訂正が或いは原本には存するのも知れない。私の浅い経験だけからすると、訂正ないし書込みは写真では明確にとらえにくく、原本かマイクロフィルムを見ていないと見落してしまう所がままある事を考慮に入れると、原本では訂正されている事もあり得るかも知れないが、写真版ではどうも訂正されていると

は見えない個所が多く、少くとも竜大所蔵の写真本と大正蔵を比較し、更にS本と大正蔵の校合結果を通して見た限りに於いては大正蔵本は原本に忠実でないばかりか、ミスプリントもあり信頼を置くに値しないと断言できる。『歴代法宝記』は燈史としては特殊な形態を有しているが、無相・無住に關して云えば、他の燈史・仏教史書にはあまり見られない蜀地に於ける禪宗の發展状況を明らかにしている点無視できない燈史の一つであるが、大正蔵本があまりにも杜撰なものであるので改めて正確な定本作りが必要である。

次に、三本を内容の面から検討してみたい。内容を檢尋する場合、文脈上の前後関係・歴史的な事実などを中心に三本を檢討する方法もあるが、ここでは引用經論の正確度から三本を比較し、いずれが善本であるかの一つの視点を得たいと思う。ところでこの方法は既に鈴木哲雄氏がP 原本とS本との比較の面から考察されたものではあるが、鈴木氏の研究は大正蔵にのみ依拠されたものであつたので、上述の如く『歴代法宝記』に限り大正蔵が信頼できず、その校合にも信を置けない事が判明した現在、改めて比較し直す必要が生じて来た訳である。更にP本をもその比較に加える事を一つの目的としてゐる事を考え併せるならば、引用經論から見る三本の檢討が新たな意義を持つと思われる。ただここで注意しなければならぬのは、『歴代法宝記』の經論引用の仕方は原文

に忠実でなく、原文に見えなかつたり充当しないものがかかり存する事⁽¹⁾を考慮に入れておく必要がある。この点を注意しつつ三本に於ける引用句を尋ねて見ると、P 原本と他の二本との間に顕著とも云える相違が目につく。今ここでその詳細を述べる余裕はないので経過を簡単に述べ、その一部を報告する事にした。『歴代法宝記』は周知の如くその巻首に自ら依拠した資料三七種を掲げているだけでなく、他に『起信論』など五種の資料が引用されているが、それら凡てが引用されている訳ではなく、又現存テキスト中に引用箇所を発見できないものもあり、引用句の凡てが比較の対照とはなり得なかつたし、且つ又全部の引用句について三本が異つてゐる訳でもなかつた。ここではその一部分のみを対比させてみることにしたい。

原文	P 原本	S 本	P 本
譬如有人以指指物。小兒觀指不觀於物。愚癡凡夫亦復如是。隨言說指而生執著。乃至尺命終不能捨文字之指取第一義。	譬如以指指物。……。(以下なし) ……。(以下なし) ……。(以下なし) ……。(以下なし)	譬如以指指物。……。(以下なし) ……。(以下なし) ……。(以下なし) ……。(以下なし)	譬如以指指物。……。(以下なし) ……。(以下なし) ……。(以下なし) ……。(以下なし)
凡愚衆妄想不聞	愚夫……說……	愚夫……說……	愚夫……說……

『歴代法宝記』の諸写本について (近藤)

真実慧言語三苦	…… 愚 ……	…… 愚 ……	…… 愚 ……
本真実滅苦因譬	因……是……言	…… 愚 ……	…… 愚 ……
如鏡中像雖現而	說即變異真実離	…… 愚 ……	…… 愚 ……
非有於妄想心鏡	文字……相……境	…… 愚 ……	…… 愚 ……
愚夫見有二不識	……生二種見……	…… 愚 ……	…… 愚 ……
心及縁則起二妄想	……生二種見……	…… 愚 ……	…… 愚 ……
想了心及境界妄想	……生二種見……	…… 愚 ……	…… 愚 ……
想則不生	相……忘即……	…… 愚 ……	…… 愚 ……
	…… 忘即……	…… 愚 ……	…… 愚 ……
	…… 忘即……	…… 愚 ……	…… 愚 ……
	…… 忘即……	…… 愚 ……	…… 愚 ……

この二つの対照表で判る如く、P 原本は文脈上全く通じない部分があつたり、書写上の誤りと思われるものもあり、又原文とは字句の違いが多いのに対し、他の二本はより原文に忠実である。

以上の如く三本の中では首尾完結しているのはP 原本のみであるが、これは他の二本とは別の系統に属すると考えられる。しかしてP 原本は文脈上の連絡・引用文からの検討のいずれを取り上げても最悪の写本であると云う事ができる。これに対しS 本とP 本は語句の出入も少く、文章的にもP 原本よりは意味が通る数が圧倒的に多いのであるが、P 本の修訂がS 本にごく近似したのを見てなされたと推定できる事を考えると、本文訂正の数も最も少く、且つ破損部分もP 本よりはずつと少ないS 本が最良の写本という事になる。大正蔵の『歴代法宝記』が全く信頼できない事が判明した現在、新しい定本作りが是非必要なのであるが、その場合S 本を底

本とし、P本を参照しつつ欠けている部分をP原本から補正するという方法が最良と考えられるのである。

1 田中良昭「敦煌禪宗資料分類目錄初稿」I (駒大仏教学部研究紀要二七)。

2 「寂滅即是涅槃、(動)不順生」(一八六a) P原本動を消す。

S本 \parallel 十動。「和上見非常歡喜、令遣安乾師」(一八六c) P

原本「金和上」とあつたの消し令を加える。S本 \parallel 金和上。

「当夜随衆受縁。(只)經三日三夜」(一八六c) P原本只を消す。

S本 \parallel 十只。「無住和上默然入山、後、金和上……」(同上) P原本後を加上。S本 \parallel 後。「我聞世尊説」(同上) P

原本説を加上。S本 \parallel 説。「白和上云、請六時礼懺伏願(和上)聽許」(一八七a) P原本「逸共諸同住欲得」とあつたのを消し請を加える。S本 \parallel 逸共諸同住欲得。P原本和上を消す

S本 \parallel 十和上。「比間糧食並是絶断、并人般運……」(同上) P原本縁を消し断を加上。S本 \parallel 縁。P原本并は加上。S本 \parallel 一并。「相公問牛望仙君等」(一八八a) P原本等を加上。S本 \parallel 一等。「僕射言、肝由来……」(一八八b) P原本言を加上。S本 \parallel 一言。「使人潜聴、更待处分」(一八九a) P原本「進止」とあつたのを消し処分を加える。S本 \parallel 進止。「恒沙仏藏一念了知」(一九二a) P原本知を加上。S本 \parallel 一知。

「後引表妹(姓草)、是蘇宰相女」(一九二b) P原本姓草を消す。S本 \parallel 十姓草。「和上所引諸經了義直旨……」(一九二c) P原本「无」を消し直にす。S本 \parallel 无。尚大正蔵の注25は「直 \parallel 」としてゐるが不は无の誤り。「大乘妙理至理空賦」(一九三b) P原本「控」を空に。S本 \parallel 控。「妄念不生、即是益之、觀見心王時、一切皆捨離、即是有益之」(一九三c) P原本いずれも「損」を益に直す。S本 \parallel 損。「恒沙仏藏一念了知」(一九四c) P原本知を加上。S本 \parallel 一知。「禪門経云食著禅味」(一九五a) P原本「師」を門に直す。S本 \parallel 師。「無慢斯須雖(開)塞阻遙」(一九五c) P原本開を消す。S本 \parallel 十開。「是過去諸仏、如来之仮説」(一九六a) P原本仏を加上。S本 \parallel 一仏。

3 (1)「四方竜像、尽受帰依」(一八二a)をP本は「象」とす。

(2)「後至咸亨五年(同上)をP本は「亨」とす。

4 「楞伽経云……則是無為靜」(一八二c)の「為」を消し「達」としてゐる。

5 「無住和上默然入山、後、金和上……」(一八六c)の「後」を加筆してゐる。尚P原本もこの部分は加筆である。

6 一八三c・l1。 7 一九六a・l15。

8 公 \downarrow 云(一八九a・l4)。山 \downarrow 上(一八九c・l21)など。

9 一八一c。

10 田中氏前掲論文。

11 「保唐寺無住の『無念』」(印仏研一八一)。

12 柳田聖山『初期禪宗史書の研究』二九六頁。

13 柳田氏前掲書、同頁。

14 『大乘入楞伽経』卷五(大正一六・六一六a)。

15 一九〇bに相当する。

16 『楞伽阿跋多羅宝経』卷四(大正一六・五〇五aとb)。

17 一九〇cに相当する。